

200年先を 思い描く

調布市平嶋邸

下ノ玄関を入ると幅の広い階段と廊下。この窓にも障子を使っています。右側には小さなカウンター付きの小窓があり、キッチンとつながっています。

右ページ

左ノ1階を三間一続きにした時の眺め。床材が手前と奥で違っているのがわかります。中央の部屋は客間になるため無節の床材を使用。手前の部屋は寝室です。右ノ1階和室。ここにも立派な梁があらわしになっています。

「あのお家はいい家だから、しっかり見てきなさい。」

平嶋さんのお宅を紹介してくれた方はそう言いました。お宅へ向かう最後の角を曲がったとき、一目でこれから何うお家がありました。新しい家でありながら、重厚な佇まい。「父親が大工だった。」という平嶋さんの言葉を聞いて納得。幼い頃から何軒も家が建つのを見ていたんだそう。家を建てるにあたって、最初は建て売りの家でもいいと考えていたようですが、実際その家を見てみると、建具に木が使われていませんでした。その時、「これは家じゃない。」と思ったそうです。では、どうせ建てるならオール無垢の木材で建てようということで、注文住宅を請負う住宅メーカーにも当たってみました。細部に至るまでの完全な注文住宅は無理と言われました。

そんな折り、たまたま見えていたNHKで多摩産材での家づくりを紹介する番組を放送していました。すぐにその番組に出ていた方に会いに行き、いろいろ話す中で、やはり家は土地のものを使って建てるのがいいだろうという話になったそうです。「山も荒れてるでしょ。だからその一助になれば、ということだね。」さらには「こういう家を建てないと、そういう技術も残っていかないでしょ。」と平嶋さんは言います。まずは100年



200年保つ家を建てること、輸入材は一切使わない、という理念のもと、平嶋さんの家づくりがスタートしました。だから、この家はほとんどが多摩産材でつくられ、昔ながらの技と知恵をそこかしこに見ることができます。その技と知恵とは、例えば材の一部に葉枯らし材*を使用していること、構造材は全て木裏*が家の中心に向いているということ、壁は真壁*で左官屋さんに塗ってもらい、建具*もひとつひとつが職人さんの手によるものです。そんな昔ながらの技と知恵の家であると同時に、お湯の熱を利用した床暖房や太陽光発電設備といった現代の設備も取り入れて、より快適な住まいとなっています。

「今の家はほとんどが合板でつくられているけれど、合板の糊は20年25年くらいしか保たない。そして、ランニングコストは鉄筋のマンションでも一戸建てでも大体一緒。それならば先にお金をかけて100年200年保つ家をつくった方がいいはずなんです。」確かに今の住宅は2~30年しか保たないといわれます。そうすると30代でローンを組んでやっと家を購入したとして、定年の頃には家が不具合だらけ…なんて困ってしまいます。

「一番保つのは木です。」と平嶋さんは言い切ります。「コンクリートの耐用年数は最初100年と言っていた。でも今は45年とか言ってるでしょ。それに引き換え昔の家は平気で100年200年使ってる。古い農家のお宅なんていうとそれは立派なものです。本当は構造材くらいは日本のものを使った方がいい。南洋材なんて使ったら家が保たない。高いか安いかは別として、やはり日本の風土にあった材を使うのが一番いいんです。」住んでいる地域の木を使うことで、家が長持ちして、ついでに山の環境整備にまで一役買えるなら、そちらを選ぶ人は案外多いのではないのでしょうか？

「環境面から考えても木を使うのはいいこと。誰かひとりではなく、みんなが良くなる方法を考えればいいんですよ。」と平嶋さんは言いました。なるほど、それは、どっしりと構えて落ち着きのある、懐の大きなその家に住まう人びつりの言葉のような気がします。

文ノ高橋亨子

葉枯らし材

伐った木を枝葉のついたまま数ヶ月間林内に置き、残した枝葉から水分蒸発させることにより木材の含水率を下げた材のこと。

木裏

製材品の、木の芯に近い面を木裏と呼ぶ。反対側のより樹皮に近い面は木表と呼ぶ。

真壁

柱や梁といった構造材を壁で覆わずに仕上げた壁のこと。これに対し、柱や梁を隠した壁は大壁という。

建具

扉や窓、襖、障子など、建物の開閉部分の部材のこと。



調布市平嶋邸 外観
2007年5月完成
設計・施工 木家団
<http://www.mokkadan.com>

